

ぶどう大粒種「紅伊豆」 (準奨励品種)

園試 大迫試験地・果樹部

1. 来歴

「紅伊豆」は紅富士（井川667号、〔ゴールデンマスカット×くろしお（巨峰×カノンホールマスカット）〕）の芽条変異で、1980年に種苗登録された赤色系4倍体品種である。本県においては、昭和53年導入以来耐寒性収量および品質等特性を検討した結果有望と認められた。

2. 特性の概要

- 1) 果房は350g前後の円錐形、果粒は楕円形、1果粒10g前後、果皮は鮮紅色。果肉は黄白色、肉質は崩壊性で甘味高く（糖度18度）、多汁。独特の芳香があり食味は良好。日持ち性は中程度。
- 2) 樹勢は旺盛、花芽の着生も良好で、花振るい性、裂果性は殆どない。
- 3) 熟期は大粒種の中では早生の中に位置し、本県では9月第4～第5半旬が収穫のピークとなる。
- 4) 耐病性（晚腐病、灰色カビ病、ベト病等）、耐寒性はキャンベルアーリーに比較しやや弱い。

3. 準奨励品種に採用する理由

本県のぶどう栽培における品種構成は、大衆性品種であるキャンベルアーリー（70%以上）が主体であるが、最近は大粒種の需要も多くなってきており、これに対応するため本県向き大粒種について検討を重ねた結果、『紅伊豆』が県中以南の地域で栽培が可能なことから、地域を限定し昭和63年より準奨励品種に編入する。

4. 主な適応地域及び普及見込み面積

適応地域 県中～県南 栽培見込み面積 50ha

昭和61年度参考事項「ぶどう栽培の気象条件からみた栽培適地図」に合致したうえ栽培地としては重粘土壌、排水不良地帯、奥羽山系多雪地帯を除いた北上川流域で、標高150m以下の地域に限定する。

5. 栽培上の留意点

- 1) 本種は耐寒性がつよくないので、春植え（4月上～中旬）とし、冬期間の凍寒害防止対策を実施する（稲わら又は市販の防寒資材で主幹を保護）。併せて園地の防風対策を徹底する。また、十分な排水効果が得られない園地には植栽しない。
- 2) 仕立て法は平棚長梢仕立てとする。
- 3) 10a当り植栽本数は40～50本とし、5～6年後1/2間伐。10年後1/2間伐とする。また、フィロキセラ抵抗性が弱いので接木苗を用いる。
- 4) 高品質安定生産を図るため、過着果はつつしみ、房作り（1果房30～35粒）を入稔に行なうとともに、病虫害防除のため、落花後の笠かけ（6月下旬）や摘粒後の袋かけ（7月下旬～8月上旬）等適期作業が重要である。このため1戸当り栽培可能面積は30～40aである。

- 5) 施肥は幼木（1～3年生）では無窒素、成木ではN4～6kg/10a（10～11月施肥）とする。
- 6) 本種は脱粒しやすいので、収穫調整時等にはていねいに扱う（三角袋の利用、収穫後の予冷は脱粒・腐敗果防止など鮮度保持効果が認められた）。店頭における販売可能期間は20日間程度である。

6. 試験成績

表一1 大迫試験地における樹齢別収量 (kg/10a)

定植1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目
—	30	200	550	800	1250

注) 収量は6樹の平均

表一2 房の大きさと果実品質 (昭62)

着果程度	平均房重 (g)	房長 (cm)	粒経 (mm)	粒重 (g)	糖度 (RH)	酸 (%)	房数 (33m ²)	換算収量 (t/10a)
中	416	18.3	26.8	11.8	18.6	0.50	10	1.25
多	510	18.3	25.7	12.7	16.9	0.62	12	1.84

表一3 単位面積当り結果母枝数、新梢数の目標

単位面積	結果母枝数	総芽数	無効芽数	新梢数
3.3m ²	2	16～20	4～5	12～14
10a	600	4800～6000	1200～1500	3600～4200

注) 着房数は1新梢1房を基準とする。

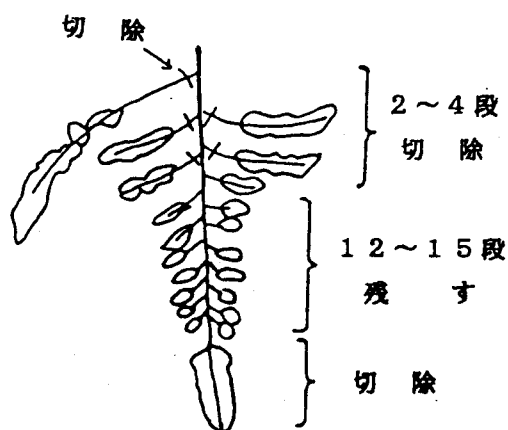


図1 花穂の整形
(開花前に行なう)

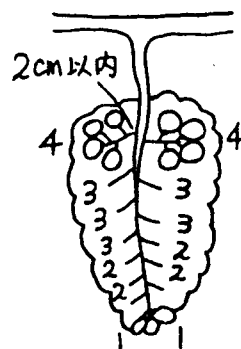


図2 着粒部位別着粒数の目安